

【論 文】

子どもの健康における身体のとらえ方； 身体知の観点からの検討

田 崎 みどり

How to Recognize Children's Body Concerning to the Health;
A Study from the Viewpoint of the Embodied Knowledge

Midori TASAKI

I 問題と目的

2017年に幼稚園教育要領、保育所保育指針、及び幼保連携型認定こども園教育・保育要領が改定された。本改訂では保育所も幼児教育施設であることが示され、3法令の内容の共通化がいつそう進められた（平野，2018）。また小学校教育への接続を強化して乳幼児期の教育の土台を明確にするために、それらを貫く柱として「知識及び技能の基礎」、「思考力、判断力、表現力等の基礎」、「学びに向かう力・人間性等」という3つの資質・能力を基本に置き、幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿として具体的に示された。これら3つの資質・能力と10の姿は決して新しい考え方ではなく、これまでも求められてきたことであり、5領域のねらいの中に反映されている（平野，2018）。

5領域とは「健康」、「人間関係」、「環境」、「言葉」、「表現」であるが、この中で一番目に位置付けられている領域「健康」には、他の4領域とは異なる点がある。それは、領域「健康」が乳幼児期の生活全体を支える基礎的事項で構成されている点である（上垣内，2018）。子ども一人ひとりに応じた健康な状態が保障されていなければ、他領域の内容を充実させることは難しい（高橋，2018）。そのため領域「健康」は、他の4領域の土台に位置付けられる重要な役割を有している。

これら5領域には、それぞれ幼稚園終了までに育つことが期待される心情、意欲、態度としての「ねらい」、そしてねらいを達成するために指導する「内容」が示されている。しかし、この「内容」は抽象度が高いため、どのような手段で子ども達に経験をさせていくのか、という点については個々の保育者の力量にかかっている点があるという（渡邊，2015）。

無藤（2009）は、保育「内容」の課題について以下のように指摘する。「保育は（そして人すべての活動は）子どもとの関係において成り立ち、そこでの対象が何であるかは決定的に重要であると考えています。（中略）内容そのものというのは、例えば表現で言え

ば音楽について教えるとか、図工について教えるとかです。環境で言えば植物だの動物だのについて教えるはずですが。それに対して、もっとプロセスを重視するという立場では、そこで子どもがどうかかわるかという『遊び方』『使い方』『かかわり方』だとか、『そこで子供がどういうことを思うか』とかに注目していきます。(中略)例えば子どもがウサギにかかわっているときに、ウサギの生態を知らなくては指導はできないわけだけれども、同時に子どもがウサギにかかわることで子どもはそこで何をするのか、何を得的なのか、何を感じるのかという子どもの学ぶプロセスを知らなければいけないはずですが」。

その上で無藤(2009)は、「健康」の領域を身体のある方から検討することの重要性を指摘する。保育における遊びの中の学びとは感覚的・感性的・身体的な学びであり、「身体知」(embodied knowing, embodied cognition)と言える知である(無藤, 2009)。無藤は「身体知」について「十分に言語化・概念化できるのではない」(無藤, 1997)とし、明確な定義を示してはいない。しかし近年、様々な領域で身体知に関する研究が報告されている。そのため諸研究の知見によって、無藤の用いる「身体知」の概念をより明確化できるのではないかと考えられる。

したがって本論では、5領域の土台の役割を有する領域「健康」における無藤(2009)の身体のとらえ方について「身体知」の観点から検討し理解を深めることを目的とする。次項では領域「健康」における無藤の身体のとらえ方を示し、次々項で身体知に関する諸研究を概観し無藤の「身体知」への理解を深めていく。なお、本論では無藤と他の身体知に関する概念を区別するため、無藤の概念については「身体知」、他については「」を用いず身体知と表記することとする。

II 領域「健康」において身体をどのようにとらえるか

無藤(2009)は「健康」の領域には大きく以下の2つの内容があるとする。一つは「身体をちゃんと動かす」、「心身を躍動させる」、「日常生活に必要なことをきちっと行う」という健康的な習慣を作ることである。そしてもう一つは「心と身体」であり、子どもの場合には両者の結びつきが強いので、できるだけ心身を一体的にとらえようとすることが重要であるとする。さらに無藤(2009)は、「健康」の領域を身体のある方から検討することの意義を主張し、以下のように述べている。「自分というものがあって、身体を持って生きている。その自分への関係だと思っただけです。ですから、自分の身体というものに対してどうかかわっていくかという問題として見ることになります」。

無藤(2009)によると、身体をとらえる視点には①身体の動き、②身体の感覚、③身体と環境、という視点からのとらえ方があるとし、①～③にはそれぞれ相反する捉え方があると述べる(「表1 身体を捉える視点」参照)。これら①～③のなかで最も重要視されているのが、「③-2 身体と物との関係を見る」とらえ方である。無藤(2009)は、手は何かというときに、手があって指が5本あるというのは身体を対象化した「③-1 身体そのものをみる」とらえ方であるとする。そして、手を対象化するよりも、手の働きに注

表1 身体を捉える視点

	身体のとらえ方
①身体の動き	①-1 身体を動くものとしてとらえる
	①-2 そこにある動きを無視してとらえる
②身体の感覚	②-1 身体の外側の形（皮膚感覚、体格等）に注目する
	②-2 身体内側の感覚（内的な身体感覚）に注目する
③身体と環境	③-1 身体そのものをみる
	③-2 身体と物との関係をみる

*無藤（2009）より筆者が作成

目し物とのかかわりとして考えるべきであると主張する。

「例えば物をつかむとすると、手がつかんだように見えるでしょうけれども、これは実は腕全体を延ばしているわけです。そのときに、既に上半身を前傾しなければつかめないのです。そうすると、手で何か物をつかむということは、手の働きではなくて身体全体の働きだということです。（中略）人間の身体の動きというのは常に周りの対象との関係の中にあります。ものをつかむときに、私たちは主体的につかむと思うけれども、同時にものの側はつかまれているわけです。（中略）相手が人間だともっとはっきりしますが、相手も反応して動いています。そうすると、私が相手をつかんだのか、相手が私をつかんだのか。昔から言うように、拍手をするときに右手が叩いたのか、左手が叩いたかと言えば、その両方なのです。（中略）人間に自分の体があって身体が動いています。ですから、身体の動きというのは周りの環境とのセットの中にあるわけです」（無藤，2009）。

このようなとらえ方は、子どもという主体とそれがかかわっている対象を込みにして、一つの生態的なシステムの変化としてとらえる見方である（無藤，1995）。無藤（2013）は、「子どもがその環境において様々に活動しつつ、環境の意味を汲み出している。それを保育者は見つつ、働きかけ、また環境側の構成を作り替えていく。その人間的営みを見直すことが保育の生態学である」とし、「子どもと物・人との関係と、その関係を媒介する保育者の働き、という視点で捉えることができる」とその意義に言及している。主体と対象との関係を身体の側からとらえるとは、主体の心の働きを具体的な対象との関りにおける「動き」としてとらえることである（無藤，1995）。無藤（1986）は、「われわれにとっての課題は、子どもの世界を子どもの発達とからめつつ、記述することである。それはどのようにしてなされるのか」と問い、「媒体」の概念を導入する。

媒介とはヴィゴツキー理論において用いられる。ヴィゴツキーは、人間の高次精神機能（認知機能）は、人間の活動が道具や言語・記号によって媒介されることによって成立するとした（田島，2003）。ワーチ（1991）は、「媒介手段に焦点を当てることは、『皮膚を超えて拡がった精神』すなわち、媒介された行為の行為者は媒介手段を用いて行為する個人、もしくは諸個人であるという、もう一つの重要な意味にふれることになる」と述べ、ヴィゴツキーと全く異なる理論に基づくベイトソンの実例を提示する。「たとえばわたしが盲人で、杖をついて歩いているとします。そのとき、一体どこからが『わたし』なのか。

杖の柄のところか、杖の真ん中あたりなのか、それとも杖の先なのか。こういうのは無意味な問いであります。杖は、差異が変換されながら伝わっていく道筋であるのですから、システムの外側を描くのであれば、これら数々の伝達経路を切断するように線を引いてはなりません。そうしてしまったのでは、システムの説明が途中で途切れてしまうわけです」。

無藤（1986）は、媒介として考えられるものとして第一に身体、第二に言葉、第三に文字、第四に絵画・マンガ等の映像メディアをあげ、これらの媒介とは異なる次元で重要なものとして他の人間をあげている。無藤（1986）は媒介としての身体について、身体感覚等の身体に密着した部分も思考にとって重要な意味をもつこと、身体は他者や世界を理解するうえでのモデルになりうるとして注目している。「思考活動も、実は、純粹に頭の中だけで行われることは（生物では）ありえず、身体に支えられてなされる。それは、単に、頭が身体の一部だからというだけでなく、全身の生理学的・心理学的興奮や覚醒、リズムをともなつてなされるからである」。

このような身体のとらえ方に基づき、無藤（2009）は保育における遊びの中の学びとは感覚的・感性的・身体的な学びであり、「身体知」(embodied knowing, embodied cognition)と言える知であるという。「子どもの対象との関りにおける動きの発達を援助するものとして保育をとらえるとして、子どもの側から言えばそこで何が獲得され、習熟するのだろうか。能力とか知識といったものに還元するのではないとすれば、『身体知』というあり方ではないだろうか。体得するという表現がある。高度な知恵とか悟りを意味する用法もあるが、運動などの場合のように、実際に体を使ってできるようになることを指すこともある。十分に言語化・概念化できるのではないが、確かに、ある対象に対して高度な取扱いが可能である場合に、体得したと言えるのであり、知的な要素を含んだ活動においてもそのような状態に達すれば身体知と呼べることになる」（無藤，1997）。無藤の「身体知」の背景にある身体のとらえ方は、どのような理論に基づいているのだろうか。次項ではその点について検討したい。

Ⅲ 「身体知」の背景にある諸理論

無藤（1997）は自らの研究を振り返り、始まりはミードの“Mind, Self, and Society”であり、その後ピアジェの枠組み、エスノメソドロジー、会話分析、スキーマ理論、ルーティン、アフォーダンスなどの枠組みを用い、幼児の保育への応用へと焦点化することを試みてきたと振り返り、「身体知」はアフォーダンス理論にヒントを得たの考えであると述べている（無藤，1997）。アフォーダンスとは、知覚と行動から生態心理学を創始したギブソンの造語である。環境の事象は、それ自体が動物の活動に関与する意味であるとし、英語の動詞 afford からの造語で affordance と名づけられた（佐々木，2013）。無藤（2009）の「身体知」の背景には、これら主体と環境との相互作用、そして身体を最も重要な媒体と捉える視点があると考えられる。

無藤（1997）は自らの「身体知」についてアフォーダンス理論にヒントを得たと述べて

いるが、アフォーダンス理論だけではなく、これまでの幼児保育の現場に根差した実践的な知に基づくものであろう。「媒介」はヴィゴツキー理論の中心概念であるため、無藤（1995；1997；2009）の身体のとらえ方の基本にはヴィゴツキー理論も影響していると考えられる。田島（2003）は、ワーチ（1991）によるヴィゴツキー理論のポイントを以下(1)～(3)の三点にまとめている。

- (1)人間が外界の対象に働きかけるときに道具使用（媒介）が単に活動を容易にするというのではなく、道具使用が活動そのものを変形し、形作るという意味で、人間の活動はその媒介を考慮することなくしては理解できないということ。
- (2)人間活動は「主体－対象」という二者関係ではなく、「主体－媒体（道具）－対象」という三者関係ととらえなければならない。その意味で、「道具に媒介された行為」は人間活動をとらえる上で分離することのできない最小分析単位とみなされるべきであるということ。
- (3)道具には技術的な道具と、言語や記号などの心理的道具があり、前者は自然の征服に向けられた外的活動の手段、後者は他者や自身の行動に対する働きかけに使われる、人間自身の統制に向けられた内面的活動の手段としてとらえられる。ヴィゴツキー自身は高次精神機能の成立には心理的道具である言語・記号による媒介が必須であるとしたこと。

また特に注意すべき点として、ヴィゴツキーのいう言語とは、抽象化されたシステムとしての言語（language）ではなく、人間のコミュニケーションに使われる記号システムとしての発話・談話（speech）であり、あくまでも社会的状況の中での活動の媒介手段に注目している（田島，2003）。ヴィゴツキーは行為でもって心理学を近代理性主義や主知主義の呪縛から解放しようと試み、言葉を生み出していく根源には身振りや指差しという身体による行為と表現があることを指摘したとも言われている（佐藤，2008）。

ヴィゴツキーと同時代に生き、同様の精神風土のもとに活躍したのがバフチンである（田島，2003）。ワーチ（1991）はバフチンの理論を用い、ヴィゴツキーの理論を発展させている。バフチンは「発話」という概念を分析の基本単位とする。発話とは媒介手段としての言語であり、発話を分析するには発話を産出する「声」に注目しなければならないとする（田島，2003）。声は、主体の意志やアクセントを反映しているだけでなく、主体が発話する相手（対象）や場面の声（意志、アクセント）を反映しており、この意味で発話は常に「多声」的である。発話は常に他者の声と自分の声とを反映し、互いに会い、衝突しあうことによって成立していく。これはヴィゴツキーのいう内言に近いが、よりダイナミックな性質を仮定しており、かつ対話は対面的なやり取りよりずっと広義の現象を指し示している（田島，2003）。

佐藤（2008）は、ヴィゴツキーとバフチン、そしてメルロ＝ポンティについて行為と身体の側面から検討し、以下のように述べている。ヴィゴツキーは言葉を生み出していく根源には身振りや指差しという身体による行為と表現があることを指摘し、バフチンらは言語的記号の素材となっているのは身体であるとする。しかし、ヴィゴツキーもバフチンも、

最終的には人間の精神は言語によって完成するというもので、身体論も言語に収斂されている。その上で、ヴィゴツキー及びバフチンとメルロ＝ポンティとの差異を以下のように指摘する。「メルロ＝ポンティは、身体を言語に向かう過渡期のものではなく、人間精神の根源にあるものとして位置づける。身体を通して人間の環境世界（環世界）の中で経験したもの（中略）、これが人間精神の根源にあると考えた。（中略）この身体を軸にした世界との関わりの中で人間は独自の世界把握の仕方を獲得し、人間環境に適応していく」（佐藤，2008）。

近年「身体知」は幅広い領域でさまざまな検討がなされている。無藤は「身体知」について「十分に言語化・概念化できるのではない」（無藤，1997）と述べているが、身体知に関する諸研究との比較により、無藤の「身体知」の概念をより明確化できるのではないかと考えられる。したがって、以下では身体知に関する研究を概観していく。

IV 「身体知」はどのように定義されるのか

身体知の研究に関連する分野は哲学、心理学、体育学、神経科学、リハビリテーション、認知科学、人工知能、ロボティクスなど、極めて広範囲に及んでいる（田中・小河原，2010）。また研究領域により、身体知の定義も異なっている。これまで最も精力的に身体知研究を展開してきたのはスポーツ科学の分野であり、水泳、スキーのジャンプ、野球、槍投げ、卓球、テニスなど、多くの種目について実践されてきた（古川・植野・尾崎・神里・川本・渋谷・白鳥・諏訪・曾我・瀧・藤波・堀・本村・森田，2005）。近年徐々に進められているのが人工知能の研究分野における身体知研究であり、楽器の演奏や舞踏など、美しさが求められるパフォーマンスアートが注目されているという（古川ら，2005）。

教育の領域における身体知に関する研究を概観した樋口・王（2017）によると、体育の独自性や重要性を主張したり、体育に限らずこれまでの教育全体の偏向を批判し新たな方向性を求めようとする際に身体知という概念が引き合いに出される傾向があるという。しかし、そこで用いられている身体知の意味は明確には示されておらず、教育の領域においても身体知の意義を問う試みが積み重ねられている。樋口・王（2017）はその試みの一つとして、2012年8月の第63回の日本体育学会における体育哲学専門領域でのシンポジウム「身体知研究の現在－身体教育の可能性を探る－」をあげている。本シンポジウムのパネリストは身体性に関する研究に卓越した三者であり、田中彰吾「身体知の哲学」、生田久美子「『わざ言語』は何を目指すのか－感覚の共有を通しての学びへ－」、樋口聡「身体知研究と『体育』のゆくえ」というテーマであった。ここで樋口は「体育」という領域は他の諸領域に開かれるべきであるという考え方を示している（樋口・王，2017）。

生田（1987）は、認知科学の観点から日本古来の伝統芸道の「わざ」の世界における「わざ」習得プロセスにおける学習者の認知プロセスを分析し、「状況の中ではじめて成立する理解の仕方」「身体全体でわかっていくわかり方」「自らの生活との意味連関のなかでわかっていくわかり方」という理解の仕方を示した。「『身体全体でわかっていくわかり方』

は、『わざ』特有の習得方式であることを超えて、人間は『心』と『身体』という独立の実体から成りたっているときみなす人間についての捉え方や、それを根拠とする『知識観』をも再検討する一つのきっかけを与えてくれる。身体の動きを『心』の働きと区別するのではなく、むしろ人間が生きていく上での一つの認識の表現として捉える新しい『知』のあり方を示唆してくれていると言えよう」（生田，1987）。身体知という言葉そのものは用いられていないが、生田（1987）の「身体全体でわかっていくわかり方」には、感覚的・感性的・身体的な学びであるという無藤の「身体知」と通じるものがあると考えられる。

これまで触れてこなかったが、ここで身体という概念について検討しておきたい。そもそも身体という概念は曖昧であり、さらに欧米語の body や corps といった概念と日本語の身体とはかなり意味が異なるとされている（福島，2006）。福島（2006）は、body には人間ないし動物の「全体」の構造という意味と頭部を含まない「大部分」（＝胴体）という2つの意味があるとし、これら body の二重の意味を暫定的に身体1、身体2として以下のような論を展開する。「身体1は、すべての要素を含んだ、ある種の総体としての身体像である（中略）。身体の全体性といった概念を援用して、身体哲学を語るような議論が身体1にあるのとは対照的に、多くの日常的な概念、あるいはその延長による議論には、身体2の理解が暗黙のうちに前提とされている。（中略）身体2は、body and soul とか、body and mind という形で対比的に語られる。つまり、霊的、精神的、心理的特性と対比される身体であり、body の形容詞として使用される physical は（中略）、さまざまな意味での精神的活動（その中には思考から道徳まで含まれる）の欠如体としてイメージされている」（福島，2006）。

無藤（2009）は「身体知」の訳語として“embodied”を用いており、福島（2006）のいう総体としての身体像である身体1に基づく身体知を想定していることが窺われる。また生田（1987）の「身体全体でわかっていくわかり方」も同じく身体1に基づく身体を想定していると考えられる。また、同じく身体1に基づく身体知を想定しているのが、メルロ＝ポンティ現象学の立場から身体知を検討している田中（2009；2016）、田中・小河原（2010）である。

田中・小河原（2010）は、身体知を「身体化された知識（embodied knowledge）」であるとする。「範例として、自転車の乗り方を挙げることができる。私たちは、ほぼ誰もが自転車に乗れる。その際、どのように身体を動かせば自転車に乗れるのかは、『身体が知っている』。自転車の乗り方は、身体化された知識として、身体に定着している。（中略）この例のように、特定の行為を遂行するのに必要な手続きが身体化されている場合、それを身体知と呼ぶ。自転車の例に限らず、タイプの打ち方・ピアノの弾き方のような道具の使用法から、走り方・座り方などの日常的な動作、しぐさ、ジェスチャーの扱い方など文化的な所作に至るまで、身体知は幅広い場面で見出される。身体が物事の遂行の仕方を知っていること、これが各種の身体知に共通する点である」（田中・小河原，2010）。田中・小河原（2010）は自らの研究を「メルロ＝ポンティ現象学の方法に多くを負っている」とする。そして無藤（1995；1997；2009）はヴィゴツキー理論に基づく媒介の概念を用いた生

態的なシステムの変化としてとらえる見方であり、「身体知」はアフォーダンス理論にヒントを得たという。この両者は、「身体知」のとらえ方については比較的近いように感じられるが、背景にある理論は異なっている。そこで次項では両者の理論的な異同について検討していきたい。

V メルロ＝ポンティの身体論と「身体知」

田中（2009）は、メルロ＝ポンティを「身体に宿る知性を明晰に記述することに成功した「稀有な哲学者」であるという。現象学的な視点から見ると、私たちの身体は二つの次元から構成されている。「ひとつは、客観的で物理的な次元にある身体。医師が聴診器を当てて診察することができ、恋人がその手を握ることができる身体。本人がどう感じるかに関係なく、誰が見ても客観的にそこにある身体。（中略）私という一人称やあなたという二人称とは関係なく、それとして存在する『三人称の身体』。（中略）これに対して、もうひとつ、心理的で主観的な次元にある身体が存在する。他人にはその姿を見たり、その手に触れたりすることはできそうにないが、本人はたしかに『ある』と感じている『実在感としての身体』。心理的な次元で存在しているという意味での『心としての身体』。（中略）私という一人称にとってありありと実在する『一人称の身体』。この次元がともなって初めて、私の身体と呼べるものが出来上がる」。幻肢や身体失認のような現象は、これら二つの身体がうまく重なり合っていない状態と考えられている。

メルロ＝ポンティの身体図式論は、従来、『知覚の現象学』第一部「身体」の第Ⅲ章「自己の身体の空間性、および運動性」に詳述された症例シュナイダーの分析をもとに論じられることが多かった（田中，2009）。しかし河野（2000）は、メルロ＝ポンティの身体図式を以下のように解釈している。「われわれの身体経験は運動的なだけでなく、外界の事物と不断に関わり、それらと交流する行動的な経験である。つまり身体図式とは、運動する身体の図式であるばかりでなく、事物と関わる行動する身体の図式なのである。（中略）メルロ＝ポンティは、身体図式によって行動する身体を問題にしており、それは体位図式以上の射程を持っている」。田中（2009）は、この河野（2000）の主張を湯浅泰雄の見解を参考にしつつ示された再解釈であると支持し、メルロ＝ポンティが身体図式を論じる前提として重視するのは、「運動」ではなく「行動」という観点から見た身体であるとする。「スポーツ選手、熟練の技を持つ人、楽器を自在にあやつるミュージシャン、といった人々は、新しい行動に向けて幾度も幾度も身体図式を更新していった結果、高度なスキルを身に付けている。だが凡人であっても、無数の習慣が沈殿した身体図式を持っていることに変わりはない。生まれて間もない赤ん坊の状態では、自転車に乗ったり箸を使ったりすることはおろか、立つことや歩くことさえできないのである。私たちが当たり前と思っている行動の大半は、習慣として身体図式に書き込まれている。生きた身体の大部分は、習慣によって成立している。（中略）習慣化された行動は、意識して考えなくても身体が自然に成し遂げており、理性より身体が主体として振舞っている。と同時に意識下では、身体

図式が複雑かつ膨大な計算（いわば情報処理）を瞬時に行っている。これは、人工知能やロボットがそう簡単には真似することのできない高度な情報処理過程である」（田中，2009）。

田中・小河原（2010）は「現象学的な視点から見ると、身体運動として『できないこと』が『できること』に変化していく過程では、身体イメージの次元で運動のシミュレーションが可能になることと、身体図式の次元で運動が可能になるということという二つの段階を経ているように思われる」とし、ジャグリング未経験の被験者8名を対象に約6か月間ジャグリングの学習実験を実施した。この学習過程について、心理学的には「手続きの知識」（ものごとを遂行するための手順についての知識）が「手続きの記憶」（身体で覚えているものごとの手順）へと変換していくということである（田中・小河原，2010）。

この結果について、田中・小河原（2010）は興味深い結論を導き出している。「ある運動を習得するには、『身体がその運動を了解』する必要がある。つまり、頭で分かるのではなく身体で分かることが必要である。（中略）運動のシミュレーションをまず心の中で行い、その結果に応じて身体を意識して動かすということではなくて、状況や対象の求めに応じて身体がおのずと動くようになるということである。身体性がこのように変化すると、身体と空間の関係にも変化が生じる（中略）。身体感覚が道具を通じて外部へと拡張され、身体の外側の空間が身体内部に準ずるものとして組み込まれるのである。（中略）言いかえると、運動にかかわる外部空間を、身体内部と同等なじみの感覚とともに扱えるようになるということである（中略）。動作の意図と実際の動作とが偶然に一致する身体知の創発の瞬間があり、その瞬間に身体が動作のコツをつかみ、身体図式の更新が非連続に生じてくるのである。（中略）身体知が形成されることは、ある瞬間を境に、新たな意味ある行動が身体を通じて実現されるということなのである」。

一般には、反復練習によって運動技能が身に着くと考えられている。しかし、田中・小河原（2010）によると身体知の形成過程は反復練習によるものではなかった。田中・小河原（2010）が示した身体知の形成過程における「偶然性」や「非連続な更新」という言葉からは、無藤（2009）のいう「遊びの中の学び」としての「身体知」とのつながりが感じられる。筆者の把握できる範囲では、無藤自身からメルロ＝ポンティに影響を受けたとの記述は見いだせなかった。しかし河野（2001）によると、メルロ＝ポンティの現象学とギブソンの心理学は類似している、とたびたび指摘されているという。

ギブソンとメルロ＝ポンティは、ともにゲシュタルト心理学に強い影響をうけている（河野，2001）。「ギブソンがアフォーダンスという概念を使って論じているのは、わたしたちの行為のあり方である。（中略）行為においては、環境中の何らかの事物が前提とされている。身体運動とその事物が一对となって初めて行為が成立する。（中略）アフォーダンスとは、その環境中においてどのような行為が成立可能か、あるいは成立させるべきかを告げている特性であり、それを知覚することでわたしたちは行為を開始したり、続行したり、停止したり、変化させたりしている。アフォーダンスを知覚することで、わたしたちは自分の行為をコントロールしている」。河野（2001）は、「存在論的な基体は過程、すな

わち出来事にあるのだから、動物を考えるときには行為こそを基礎にしなければならない」と主張し、これを「過程の存在論」とする。そしてメルロ＝ポンティもギブソンと同じく行為を基軸として動物と環境を考える「過程の存在論」に基づいていると主張する(河野, 2001)。

河野(2001)のいう「過程の存在論」とは行為を基軸として動物と環境を考えるものであり、これには無藤(2009)が重視する身体のとらえ方とも接点が見受けられる。「人間の身体の動きというのは常に周りの対象との関係の中にあります。ものをつかむときに、私たちは主体的につかむと思うけれども、同時にものの側はつかまれているわけです。(中略)人間に自分の体があって身体が動いています。ですから、身体の動きというのは周りの環境とのセットの中にあるわけです」(無藤, 2009)。

先にも述べたように、無藤が直接的にメルロ＝ポンティについて言及したものは見受けられない。しかし、ギブソンとメルロ＝ポンティの類似については既に認められている。河野(2001)は、メルロ＝ポンティは以前の自分の立場を批判するようになってから、ますますギブソンの生態学的立場に近づいたように思われると述べている。河野(2000)ではメルロ＝ポンティの思想の推移が辿られているが、メルロ＝ポンティはソーシャル等の影響を受け、以前に取り扱った課題を何度も取り上げ直すことで徐々に自らの思想に独自の意味を示していく過程を有しているという。

本論は、無藤(2009)の身体のとらえ方について「身体知」の観点から理解を深めることを目的とし、身体知に関する研究を概観してきた。「身体知」に関しては概ね理解を深められたと考えられるが、時代を追って無藤の論の変遷を辿ることはできていない。メルロ＝ポンティだけでなく、研究者の論が時代と共に推移し進展していくことは当然であると考えられるが、本論ではその点について検討することができなかった。今後の課題として、時代を追って無藤の論を辿ることで、「身体知」の理論的背景をより明確に示すことができるのではないかと考えられる。

VI おわりに

本論では、無藤(2009)が示した5領域の土台の役割を有する領域「健康」における身体のとらえ方について「身体知」の観点から理解を深めることを目的とし、領域「健康」における身体のとらえ方、「身体知」の定義、そして「身体知」の背景にある諸理論について検討し、メルロ＝ポンティとギブソン、そして無藤の「身体知」における身体のとらえ方に共通点を見出すことができた。無藤(2009)は、領域「健康」において身体の動きを常に周りの環境との関係を有するものとして捉えることの重要性を指摘している。このように身体をとらえることによって、「子どもの対象との関りにおける動きの発達を援助するものとして保育をとらえる」(無藤, 2009)こと、そして発達を「子どもの側」から検討することが可能になるのではないかと考えられる。生田(1987)が示したように、「身体知」の観点からは、教えるという周知の事実と思われる行為についても、新たにと

らえ直すことが可能になると考えられる。

内容「健康」は、他の4領域「人間関係」、「環境」、「言葉」、「表現」の土台に位置付けられる重要な役割を有している。身体なくしては「人間関係」、「環境」、「言葉」、「表現」について考えることはできない。無藤（2009）が指摘する「健康」における身体、そして心のとらえ方は、「健康」だけでなく他の4領域においても前提とされることが望ましい。

近年、メルロ＝ポンティの身体論は認知科学にさらなる影響を与えている。代表的な研究には、ヴァレラ・トンプソン・ロッシュら（1991）の「身体化された心(embodied mind)」がある。田中（2016）によると、彼らはメルロ＝ポンティの現象学的身体論と仏教思想に啓発されながら、それまでの議論に欠けていた身体化された行為の観点を認知科学に持ち込み、「エナクティヴ・アプローチ(enactive approach)」を提唱した。このような、行為を通じた環境との相互作用や、環境内における身体の立脚性を強調しつつ新しい心の見方を求める学際的な議論は、2010年ごろには「4E」（「extended（拡張した）」、「embodied（身体化された）」、「enactive（行為にもとづく）」、「embedded（環境に埋め込まれた）」のそれぞれのイニシャルを取ったもの）と称されるようになってきている（田中，2016）。無藤の「身体知」に基づく身体のとらえ方は、上記の身体、そして心のとらえ方に類するものであり、今後ますますの発展が望まれるものと考えられよう。

引用文献

- 樋口聡・王水泉 2017 序 樋口聡 [編著] 教育における身体知研究序説 創文企画 p. 7-25.
- 平野朋枝 2018 第1章第3節新しい時代に向けた幼児教育と領域「健康」 春日晃章・松田繁樹・中野貴博 [編] 新時代の保育双書保育内容健康 [第2版] みらい p. 17-19.
- 福島真人 2006 身体論 海保博之・楠見孝 [監修] 心理学総合事典 朝倉書店 p. 685-692.
- 古川康一・植野研・尾崎知伸・神里志穂子・川本竜史・渋谷恒司・白鳥成彦・諏訪正樹・曾我真人・瀧寛和・藤波努・堀聡・本村陽一・森田想平 2005 身体知研究の潮流－身体知の解明に向けて 人工知能学会論文誌 20(2), 117-128.
- 生田久美子 1987 「わざ」から知る 東京大学出版会
- 上垣内伸子 2018 領域「健康」とは 榎澤良彦・入江礼子 [編著] シードブック保育内容健康第3版 建帛社 p. 1-15.
- 河野哲也 2000 メルロ＝ポンティの意味論 創文社
- 河野哲也 2001 ギブソンとメルロ＝ポンティ 現代思想 vol. 29-17., 286-298.
- 無藤隆 1986 文化的心理学の理論を目指して 日本児童研究所 (編) 児童心理学の進歩 (1986年度版), 210-234.
- 無藤隆 1995 トボスにおける発達 (第4回) : 身体知の成り立ち 幼児の教育 94(10), 35-42. 日本幼稚園協会
- 無藤隆 1997 協同するからだとことば 幼児の相互交渉の質的分析 金子書房
- 無藤隆 2009 幼児教育の原則 保育内容を徹底的に考える ミネルヴァ書房
- 無藤隆 2013 幼児教育のデザイン 保育の生態学 東京大学出版会
- 佐々木正人 2013 生態心理学 藤永保 [編] 最新心理学事典 平凡社 p. 439-441.
- 佐藤公治 2008 生成の行為論 無藤隆・麻生武 [編] 質的心理学講座①育ちと学びの生成 東京大学出版会, p. 163-188.
- 田島元信 2003 共同行為としての学習・発達－社会文化的アプローチの視座 金子書房
- 高橋弥生 2018 まえがき 子どもの健康とは 谷田貝公昭・高橋弥生 [編著] 新版 実践保育内容

- シリーズ①健康 一藝者 p. 4 - 5.
- 田中彰吾 2009 心理的身体と身体知—身体図式を再考する— 人体科学18(1), 1 -12.
- 田中彰吾 2016 拡張した心を超えて 人体科学25(1), 77-80.
- 田中彰吾・小河原慶太 2010 身体知の形成—ポールジャグリング学習過程の分析— 人体科学19(1), 69-82.
- Varela, F. J., Thompson, E., Rosch, E. 1991 The Embodied Mind: Cognitive Science and Human Experience. Cambridge, Mass.: MIT Press. (ヴァレラ・トンプソン・ロッシュ 1991 田中靖夫訳 2001 身体化された心 工作舎)
- 渡邊晴美 2015 保育内容「健康」の教育内容と方法に関する一考察 福岡女学院大学紀要 (16), 47-53.
- Wertsch, J. V. 1991 Voices of the mind-A Sociocultural Approach to Mediated Action UNI Agency. (ジェームス・V・ワーチ 1991 田島元信・佐藤公治・茂呂雄二・上村佳代子訳 2004 心の声—媒介された行為への社会文化的アプローチ 福村出版)